教徒のためにも祈り，働くキリスト教徒医療従事者たちに私は出会ってきた．しかしながら，しばしば彼らの信仰に関する熱心な口調や医療効果と結び付けた語り口に，戸惑いや反感，不安をもつヒンドゥー教徒たちがいるのも確かである．

こうしたことが頭をよぎるために，タンセン病院や岩村昇氏の活動を，伝道として行なわれた素晴らしい医療奉仕であるとして考えることに躊躇してしまう．この小さなエピソードからみても，医療援助と伝道は，医療的貢献という視点からのみでは語れない，複雑な状況をネパールにもたらしているようにみえるからだ．しかしそれでも，上記に述べてきたように，タンセン病院と岩村氏が目指した「サンガイジウネ（共に生きる）」術は，ネパールに関わる者，また援助や伝道の分野で活動する多くの者にとってひとつの道しるべとなってきただろう．

タンセン病院でキリスト教徒たちの祈りに耳を傾けながら，なんとなく居心地の悪い思いをする．それは私自身が，他の神を信じる者たちと共にどのように生きるべきかという問いの答えをまだ知らないからかもしれない．それでも，タンセンで考えたことを胸に，人はどのように共に生きられるのか，自分自身の答えを探すことを辞めないでいたいと思うのであった．

引 用 文 献

National Population and Housing Census. 2011. (Village Development Committee/Municipality) Volume02. 〈http://cbs.gov.np/image/data/Population/VDC-Municipality%20in%20detail/VDC_Municipality.pdf〉

海は道，空は地図

中 野 真 備*

「漂海民」バジョーマレーシア・サバ州や，インドネシア島嶼部を中心に拡散居住し，国籍にとらわれず，独自の言語を操り，ときにオーストラリアや中国まで海を渡った，極めて移動性の高い人びと一の多くは現在，海域世界の社会・政治・経済的変化を受け，かつては家船にのって海上生活をしていたが，陸地あるいは海上に杭上集落を建てるなど，定住化が進んでいる．私が訪れた，インドネシア共和国中部スラウェシ州バンガイ諸島県バンガイ島・ペレン島および北マルク州タリアブ島県タリアブ島・リンボ島は，こうした

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　リンボ島バジョ集落の杭上家屋

「漂海民」バジョが多く住む地域であり，バジョの人口分布上はバンガイ群に分類される［長津 2012］．

調査の拠点としている南スラウェシ州のマカッサルから中部スラウェシ州のルウッまで飛行機で 1 時間，空港から車で 1 時間かけて港へ行き，2 時間ほど船に乗ると，バンガイ諸島の入り口・ペレン島サラカンへ着く．さらに離島へ行くには，そこから車で 1 時間ほどのところにあるトビン港から 1〜2 時間ほどの船に乗る必要がある．北マルクのタリアブ島までは，さらに 8〜9 時間ほど夜行船に乗ることになる．

海から読み取るちから

ただ海と空を眺めて，ときに 9 時間近くを過ごす船旅は，退屈などころか，あちこちから情報が飛びこんでくる．海の色はたえず変わり，波は複雑な模様をつくりだす．すこし先の海が，くっきり線引きしたかのように青からエメラルドへ変われば，そこから先はプランクトンが多いのかもしれないし，サンゴ礁のある浅瀬なのかもしれない．大きな島が見えていたら，それは大陸棚かもしれない．暗い青，深い青，エメラルド，深い緑など，海の色は鏡のように，その底に広がるものを映し出す．波の模様は，風の影響によるものばかりではない．リンボ島のあるバジョの熟年漁師は，「すべての山の形には特徴がある．その山が，その形の浜をつくり，その浜が，その形の波をつくる」と話す．だから，その波で現在地がわかるのだという．浜へ波が寄せては打ちかえり，また波をつくる．その波のはね返りを読むというのだから，驚きである．まるでイルカの超音波ではないか，と私は思った．さらには，櫂を海に刺し，耳をあてて波の音を聞けば，海の深さがわかるという．まさかそんなことが，と思うが，実際に彼らはそうして漁場を見つけ，安全に漁をおこなってきたのだ．

星のこと，漁のこと

空もまた，情報であふれている．特に，船の甲板で見る満天の星空は，まぶしくて目がチカチカした．夕方から明け方にかけて漁をする人びとにとって，星はただの風景ではない．たとえば日本では，金星をイカボシとよぶ地域が多くある［内田 1973］．イカは夜行性のため，イカ漁は一般的に夜間におこなわれることが多い．その漁の時刻の目安として利用されていたのが金星だったのである．以前，新潟県佐渡島の明治 35 年生まれのイカ釣り漁師の手記をみる機会があった．そこには，頭の中にプラネタリウムがあるのではないかというほど，事細かに星の位置や出現時刻が記されていた．さらに，星と月と潮，そ

してイカ漁との関係が詳細に記されていた．2014 年に新潟県佐渡島のイカ釣り漁撈についてフィールドワークをおこなった際は，すでに漁船や漁法の機械化が進み，それぞれの星の名前を覚えている漁師は少なかった．しかし，ホシノデ（星が地平線から空へとあがってくること）・ホシノイリ（星が地平線に沈むこと）やツキノデ・ツキノイリがイカの釣れるタイミングに関係しているのだということまでは，今でも彼らは知っている．

天体の動きを把握し，利用していたのは，バジョも同様である．バンガイ諸島やタリアブ島・リンボ島のバジョ集落で，漁に行く人びとをみていると，木彫りの船に 1 人か 2 人が乗り込み，モーター以外は何も機械を積みこんでいなかった．聞けば，クンダリやマナド，トギアン諸島などの遠方へ行くときも，コンパスや GPS，魚群探知機は積まないという．それでは，私がどこを走っているのか皆目見当もつかなかった，あの 9 時間近い船旅よりもはるかに長い距離を，肉眼と経験だけを頼りに海を渡っていくということになる．たとえばペレン島のバジョは「クンダリに行くときはラヤンラヤン（凧）を目指して進む」という．ラヤンラヤンというのはおそらく南十字星のことで，小さいが明るく，見つけやすい星座である．ペレン島からはちょうど南に位置するクンダリへ行くには，確かによい目印である．こうした目印の星や星座はいくつもあるようだった．やや頼りない，小さな木彫りの船で大海原へ漕ぎ出すと，私は，突然知らない土地に置き去りにされたような気持ちになる．自分はどの方角からきたのか，どうやって帰ればいいのか，機械がなければ何もわからない．夜の海などもってのほかだ．そう感じていたのは，どうやら私だけのようだった．おそらく彼らは夜の海でも，手元ではなく頭上を仰ぎ，まっすぐと進むのだろう．手元に何もなくとも，頭の上には地図があるのだ．昼ならば山の影形や海の色などを見ることができるし，夜には月や星がある．知らなければただの風景でしかないが，彼らにとっては地図なのである．

1〜2 人のみの小規模な漁では，船が小さく簡素なこともあり，海流や潮汐に左右されやすい．サーフィンが日々の海の状態に左右されることと同様である．海流の荒れるときに小船で漕ぎ出せば，転覆してもおかしくない．特に，バンガイ諸島およびタリアブ島・リンボ島のある海域は，小さな島が散らばっていることもあり，複雑な季節風が吹き荒れ，それがまた複雑で荒れやすい海流をつくりだしている．リンボ島からタリアブ島への小船での移動は実にスリリングだった．海の色の違いが見える，魚の群れが目の前にいる，とはしゃいでいたのはほんの数分で，何

写真 2　ひとりで漁に出かけるバジョ漁師

度も文字どおり頭から水をかぶることとなった．進行方向とは逆に座り，防水バッグを腹に抱え，ヘリをしっかりつかみ，水しぶきの合間になんとか目を開けられるようになると，ようやく海の様子を見ることができた．テーマパークのアトラクションのように無茶苦茶に進んでいるように感じた船だが，向かってくる波には正面から乗り，進行方向を変えるときは波模様の合間を進んでいるようだった．小船には船首に１人が座り，船尾のモーターのところに１人が立っており，ときおり前の１人が「3 時の方角だ！」と声をあげると，後ろの１人がそれに合わせて船を動かしていた．そしてどうやらそれは，前方の島を迂回するためというよりは，かなり前方にある島の周囲で変わっている波の模様を見て，それを迂回しているようであった．漁をしている小船や，スピードボートとしばしばすれ違うが，どうやらその船を操るのはほぼ全員バジョのようである．そういえば，宿の女主人も，「あの辺は海流が荒れているからなかなか行けないよ」と言っていた．あるのは船室付きの大型船のみである．それ以外は，彼らのように海をよく知ったものでないと，この複雑な海流を進むことができないのか，と納得した．彼らにとって海はいつも歩く道のようなもので，そこにはそこの歩きかたがあるのだ．そんな彼らも，よく知っているからこそ，いつでも漁ができるわけではないようだ．リンボ島のバジョは「満月・新月・下弦の月のときは海流が強くなるから，半月のときに漁にでなければならない」という．彼らにとっての天体は，地図だけではなく漁のカレンダーの役目も果たしているのだ．

海は道，空は地図

タリアブ島からルウッへ帰る夜行船で，甲板に寝ころびながら私はぼんやりと彼らの話を思い出していた．照明などないのに，夜空一面に散らばる星々で，甲板は明るかった．はじめに金星が，そして段々と他の星々も見えはじめ，気づけば満天の星空が広がっていた．天の川など，口を開けた白く大きな蛇のようで，これを「ビンタン・ナガ（竜の星）」とよんでいたバジョの話を思い出した．星座を見つけるとき，ひときわ明るい星を手がかりにして探すものだと思っていたが，ここではそれができなかった．あまりにもたくさんの星が，どれも明るくはっきりと輝いているのである．彼らが読めたこの地図は，私には情報が多すぎて，細かすぎて，読み取れなかった．私が今まで知っていると思っていたものは，数本の線といくつかの建物しか描かれていない案内図のようなものだったらしい．往路で知り合いになった乗組員と，「あれがビマ　サクティ（天の川）」「今のはビンタン　ジャトゥ（流れ星）」などと話していると，周りにわらわらと人が寄ってくる．口をぽかんと開けて上を見ていた私は，相当奇妙だったらしい．自由で気性が荒く，粗暴だといわれる船乗りたちは，しかしとても親切で，フランクである．つたない言葉で，星や海のことや，取りとめのないようなことを話しているうちに，いつの間にか何時間も経っていたようである．「ようである」というの

は，携帯の電源を切っていたので，正確にはわからないためである．ただ，握りこぶしをつくった腕を水平に伸ばし，そこからまたこぶしを目当ての星まで重ねていくと，こぶし6つ分ほど増えていた．ということは，どうやら4時間ちょっとは経っていたらしい．空中で握りこぶしを重ねて大真面目な顔をする日本人の女は，やはり奇妙だったかもしれないが，「空図」をすこし読めたような気がして，私はひとり，小さな満足感にひたっていた．海は道で，空は地図である．佐渡のイカ釣り漁師や，バジョの漁師のあの深い目は，この風景からどれほど多くのことを読み取るのだろうか．そんなことを考えながら，船上での夜は更けていった．

引 用 文 献

長津一史．2012.「『海民』の生成過程　インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として」『白山人類学』15：45-71.
内田武志．1973.『星の方言と民俗』岩崎美術社.

声を上げる活動家たち

鶴　田　星　子*

2016年8月，3年ぶりにインド西部・プネーに降り立った．大音量のクラクションと排ガスの臭さは相変わらずだ．しかしそのようなことを思っていたのも束の間，街中に入ると見知らぬ建物が増えてくる．今回訪れたプネーは，ムンバイーに次ぐマハーラーシュトラ州第二の都市で，文教都市としても名をはせている．

「おかえり！」旧市街地にある友人の家に到着すると，久々の再訪を家族が暖かく出迎えてくれた．この家族とはかれこれ7年来の仲である．「あれー！いつこっちに来たの！！」と隣近所に住む親戚たちも私に会いに来てくれ，この日の晩は，会えなかった3年間の出来事を語り合った．

今回インドを訪れた目的は，このマハーラーシュトラ州における，ヒンドゥーとムスリムの関係について調べることだった．同州はインドでも宗教暴動発生件数の多い州であり，州都のムンバイーでは2006年7月，そして2008年11月に死者100名を超す大規模なテロも発生している．そのような状況の中で，ヒンドゥーとムスリムが互いを憎むことなく，両者の融和が実現するよう活動している団体を調査することが私の目的であった．

プネー到着の翌日，私は調査に関する指導

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科